

リオ・デ・ジャネイロ日本商工会議所

第十九代会頭 大隅 多一郎



リオ・デ・ジャネイロ日本商工会議所創立50周年記念お祝い

本年9月、リオ・デ・ジャネイロ日本商工会議所(以下商工会議所)は創立50周年の節目の時を迎えるとの連絡を受け、人生の一時期商工会議所の活動に関わりを持ったものとして感慨深いものがあります。

私自身、2回に分けリオ駐在を経験し、いずれの駐在においても商工会議所の活動に参加させていただきました。最初の駐在、1974年から1978年の時期、日本からのブラジル進出会社の活動拠点の中心はリオであり、その構成企業数は400を超え、商工会議所の昼食会、理事会は盛大なものでした。そこでは、30歳そこそこの若手駐在員として、企画委員会と何かもう一つの委員会のメンバーに選任され、リオにおける進出日本企業団体相互の連絡或いは親睦推進のお手伝いをしておりました。

しかし、私の商工会議所活動としての強い印象といえば、2回目の駐在の際(1993～1997年)、第十九代の会頭に推薦され、会頭在任期間中に、官民挙げての協力の中に展開された日伯修好100周年記念行事のリオ地区の活動です。

1995年11月10日、やや時期はずれの猛暑の中、この秋11月に華燭の典を迎えられます紀宮清子内親王殿下の臨席を仰ぎ、リオ総領事館のイニシアティブの下に、リオの日系コロニア団体と商工会議所を構成員とするリオ・デ・ジャネイロ日伯修好100周年記念事業実行委員会(以下実行委員会)として、一連の記念行事を成功のうちに挙行することが出来たことです。

実行委員会は、リオにおける記念事業の目玉として、リオ植物園に存在した日本庭園の修復建設、及びその後10年以上の日本庭園維持費までまかなえる基金の準備を企画しました。商工会議所は、その当時約US\$40万の募金を実現するに中心的役割を果たし、この募金活動を成功させるに於いて、その会員各社の寄付に加え、ブラジル企業に対してもそれぞれの影響力を発揮、実行委員会が安心して記念事業を推進できる基盤を作りました。

このことを通して、日本からの進出企業の存在感がサンパウロのそれよりもやや薄く感じられ始めていたこの時、商工会議所の構成各社が日本の親会社に対すると共にブラジル企業に対しても大きな影響力を発揮できたことは、リオ進出日本企業の力未だ衰えずの姿を見せてくれたものと、強く印象に残りました。

商工会議所活動は、リオ地区進出の日本企業の活動を支援する様々な活動を行ってきており、そのための必要経費を構成各社からの拠出金によって賄っていましたが、構成各社の皆さんのボランティア活動によって支えられておりました。日々のビジネス活動多忙の中、各社の責任者を始めとする日本からの駐在の皆さんが、骨身を惜しまず献身的に商工会議所活動を支えてくださったことが鮮明な印象として残っています。各委員会活動、中でも日本人学校運営に関わる活動、日伯両国政府からの問い合わせに対する答申案策定、ブラジル内他地区日本商工会議所との連携等々、構成各社良くあそこまで時間を割いて協力いただけたと、今思い出しても感謝の気持ちが湧いてきます。

1970年前後のブラジルブームの時期に比べ、商工会議所の構成各社の数も大幅減になっているとの話を伺います。しかし、日本企業が複数リオで活動する限り、商工会議所の活動は必要であると感じています。これまでの歴史を振り返りつつ、新しい考え方も導入し地道な商工会議所活動が継続されていくことを祈念しております。